

出前授業型プロジェクト学習の導入に向けての指針  
を探る  
色と線のお出かけ授業プロジェクトIIの考察から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱口, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/6873">http://hdl.handle.net/10098/6873</a>

# 出前授業型プロジェクト学習の導入に向けての指針を探る

色と線のお出かけ授業プロジェクトⅡの考察から

濱口 由美

## 1. はじめに

「教員養成スタンダード 領域別<sup>1</sup>」のワーキングに参加して

筆者は、美術科教育法<sup>2</sup>のカリキュラムに出前授業型プロジェクト学習を導入したいと考えている。この着想に至るきっかけのひとつは、教育地域科学部の「教員養成スタンダード 領域別」のワーキングメンバーになったことであろう。このワーキングは、中央審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(2006)で、「学習履歴の確認」を旨とする「教職実践演習」の導入が提言された政策的動向を見据え、領域(教科や障害児教育、発達科学教科)ごとの到達目標や指標の具体的な検討を行い、スタンダードを策定する目的で発足したものである。大学教員としてスタートしたばかりの筆者が、このワーキングメンバーになったことは幸運なことであった。高等教育ユニバーサル段階における学びの質の保証や予測困難な時代の中でどんな状況にも対応できる多様な人材の育成といった大学教育への責務、生涯学び続けどんな環境においても答えのない問題に最善解を導くことができる能力の育成といった大学教育の目標を視野におきながら、教員養成課程における授業カリキュラムの構想を考える機会となった。

美術教育サブコースの学習成果物を見て

「教員養成スタンダード 領域別」の実質的な策定作業は、美術教育サブコースの他の教員たちとも美術科領域におけるカリキュラムの在り方について話し合える貴重な時間にもなった。美術教育サブコースでは、卒業研究への着手要件として、3年次にこれまでの自分の学びの履歴とその跡付けが記された教科教育と教科専門の二種類のポートフォリオ型学習個人誌の作成が義務付けられていることを知り得た。このポートフォリオが自身の学びの伸びや変容を多面的・長期的に評価し新たな学びに生かされるのはもちろんのこと、就職活動においても自己アピールの貴重な資料として活用されているといった有用性も確認することができた。また、実際に手に取って見ることで、この学習個人誌が、教科教育と教科専門という二つのフィールドでどのような学習経験の場を学生に保障しているのかを教員同士が確かめ合える貴重な資料にもなっていることに気付いた。今後は、この二つの学習成果物がスタンダードに即した能力を評価する際の証拠となるため、学習記録の方法やまとめ方などの学習個人誌の更なる改善を進めていく必要があると思われるが、そのためにもまずはスタンダードを視座においた授業改善に自らが取り組まなければならない。

## 出前授業型プロジェクト学習導入にむけて

筆者は、本年度(2012)後期から、学部2年生が受講する「美術科教育法」の授業カリキュラムに、出前授業型プロジェクト学習の導入を予定している。ここでの「出前授業」とは、筆者と美術科の院生たちが中心になって「地域貢献となる参画事業」の一つとしての取り組んできた「色と線のお出かけ授業プロジェクト」のことである。探求的な教材研究の場と教員との協働的な学びの場が創出してきた「出前授業」のようなプロジェクト学習を、美術科教育法の授業に導入することで、「自らが学び自らが考える探求的な授業やカリキュラムを日々創り出すと同時に、教育に関する様々なネットワークの結び目を創り出していく存在として活躍する教員」として、成長していく種を蒔くことになるのではないかと考えたのである。しかしながら、「出前授業」は、既に教員養成課程に設置されている教育実習などの「臨床経験」とは異なる意味をもつ実践の場であると考え。どちらも現場の状況に参入し、そこで生じる現実の具体から五感をフルに活用して実践者としての視点をつくる学びの場を得ることに差異はないが、ここでの「出前授業」は美術教育の専門的知識や技能を必要とする学校現場のニーズがあって参入していく教育支援活動である。当然、現場教師からの事前指導などはなく、院生たちも実習生やインターンとしてではなく美術科教育の専門家として学校現場に向かっている。このような意味合いをもつ「出前授業」から、何を踏襲すべき指針として押さえていけばよいのであろう。出前授業型プロジェクト学習の導入に先かぎって、このことを整理しておく必要があるだろう。

そこで、本稿では、筆者と美術科の院生が取り組んできた「出前授業」の一つである「色と線のお出かけ授業プロジェクト」の活動で創出してきた探求的な教材研究の場と教員との協働的な学び合いの場がどのようなものであったのかを明らかにし、美術科教育法の授業カリキュラムに導入する出前授業型プロジェクトの指針を探り出していきたい。

## 2. 「色と線のお出かけプロジェクト」の概要

### 「色と線のお出かけ授業プロジェクト」の実際の活動の流れ

- 8月22日 A小学校M教諭から出前授業を依頼される。
- 8月28日 プロジェクトを立ち上げる。
- 9月12日 事前打ち合わせのため、A小学校へ訪問する。
- 9月13日 教材開発研究を開始する。
- 10月5日 A小学校で出前授業を実施する。
- 10月7日 A小学校を再訪問し、完成した作品を見せてもらう。子どもたちからのお礼の手紙をいただく。
- 11月11日～17日 第22回福井市小中学生国際交流作品展で展示される。(於 福井市美術館)

M1の院生と筆者が中心になって取り組んできた出前授業

「色と線のお出かけプロジェクト」は、学校や地域からの注文を受けてから発足するオーダーメイド型である。これまでに、福井県版アートカードを活用した単元開発や養護学校における版画題材の開発とそれらの実践などに取り組んできた。本稿で取り上げる「色と線のお出かけプロジェクト」(プロジェクトと記す)は、2011年8月に、福井市の公立小学校(以後A小学校と記す)からの「福井市小中学校国際交流展に出品する共同作品の指導をお願いしたい」という依頼を受けて立ち上がったものである。学習者はA小学校2年生3クラス(91名)、指導者となるプロジェクトのスタッフは院生(M1)5名と筆者の6名であった。実際の活動の流れは、「色と線のお出かけ授業プロジェクト」は、下図のような流れで進化した。

### 3. 出前授業に向けての教材研究

#### (1) 授業デザインの方法を実践的に学び合う場

A 小学校からの出前授業依頼には、「福井市美術館で開催される福井市小中学校国際交流展に出品する共同作品の指導をお願いしたい」という「注文」がついていた。この「注文」はイベントや他教科の付随的表現活動としてすり替えられることが多いと指摘されている図画工作科や美術科の教科が抱える「課題」がそのまま露呈されているものでもあった。

出前授業を前提とした題材開発は、この「注文」がもっとも優先されなければならない学習条件となるために、毎回こういった「注文」とどう向き合うかが題材開発の重要ポイントとなる。今回のような「福井市小中学校国際交流展に出品する共同作品の制作」といった注文をそのままを題材開発の目的にしてしまうと、子どもの存在を無視した大人たちの都合から生じる課題の対処的解決のための授業になってしまう。この「福井市小中学校国際交流展に出品する共同作品の制作」といった注文が、子どもたちにとっての良き学習条件として位置付けた題材開発が自分たちに課せられた「ミッション」であることをスタッフで確認しながら題材開発に取り組むことにした。最終的に A 小学校に提案することになったのは、「海の中でかくれんぼ」という造形遊び<sup>3</sup>の題材である。A 小学校の担任教師が語った「造形遊びは、低学年でもあまりやっていませんね。」と一言が、この題材を選ぶ決め手になっていたであろう。

材料や場所に自ら働きかけるプロセスを楽しむ造形遊びの活動は、自分の感覚や行為などを通して形や色をとらえ、そこから生まれる自分なりのイメージを基に思いのままに活動し、つくりつくりかえつくり続けていく。そのために、「何をつくっているの?」と子どもに声をかけることさえも躊躇してしまうほどの学び浸る時間を生み出すことがある。それにも関わらず、造形遊びの価値がこれほどまでに理解されずにいるのか、といった問いを A 小学校の担任教師の言葉をきっかけとし、投げかけたときのことである。一人の院生が「造形遊びの活動も福井市小中学校国際交流展への出品制作も、造形活動のための材料や場所の準備が大変だと思われるのではないだろうか。多忙な学校現場の教師たちにとっては、造形遊びや展覧会への参加というのは負担のかかる学習条件として捉えられているのであろう。」という考えを述べた。それを受けて、別の院生が「二つのマイナスの学習条件を掛け合わせてプラスの条件にしよう」と、ダイナミックな造形遊びの痕跡が「福井市小中学校国際交流展」の展示作品となるような題材開発の方向性を提案した。それなら、今回の出前授業の注文が、子どもたちにとっての良き学習条件として位置付けることができると他のスタッフも同意し、造形遊びの活動が盛り込まれた題材を開発することになったのである。

出前授業は、学校がすでに設定しているカリキュムの内容をより充実したものにしたいと考えたり、現場の教員だけでは対処できにくい課題に遭遇したりしたときに依頼されることが多いため、具体的な「注文」が提示されることも少なくない。しかし、この「注文」があることで、院生たちの意識は大きく変わる。「自分の得意分野を活かしたもの」や「おもしろいと思ったもの」といった個人レベルの価値意識からの題材開発ではすまないからである。A 小学校からの「注文」をどのように受け止めるかといった話し合いの場でも、その背景に潜む学校の課題も考慮し、自分たちの立場を活かしながら最良の学習活動をデザインしなくてはならないという責務のような意識が高まってきた。「注文」に十全と答えたいと思う意識が、「二つのマイナスの学習条件を掛け合わせてプラスの条件にしよう」というプロジェクトのミッションの方向性を創出したのであろう。次節では、そのミッションを遂行するための教材研究における学び合いについて明らかにしていく。

(2)造形活動の意味を模索する教材研究の場

プロジェクトのスタッフが、A小学校の出前授業で実施するために選んだ題材「海の中のかくれんぼ」は、「ステンシル版画」と「造形遊び(ローラー遊び)」の複合材である。この題材のための教材研究の場で、筆者は解放感がいっぱいの趣でローラー遊びに真剣に取り組む院生たちの姿に遭遇した。白い障子紙に最初のローラー線を引くときには緊張をほぐすための「うわああ」が飛び出し、偶発的に生まれてくる色の表情や模様を発見したときには「うわああ」という喜びの言葉をこぼしていた。彫刻・絵画・金工と幅広い領域に取り組んできた教科専門の授業では、様々な素材や材料と関わってきたであろう院生たちが、プリミティブな造形遊びの活動にこれほど夢中になることに意外であった。活動後、筆者は、そんな院生たちに「自身の作品制作のための材料体験」と「造形遊びの材料体験」の違いを「問い」として投げかけた。その「問い」に対する話し合いのために院生たちがワークシートに記した内容の一部を次の枠内にまとめた。

作品制作のための「材料体験」は、「材料研究」である。材料と関わろうとする側に目的があるので、材料に期待する価値があらかじめ存在している。そのため、どうしても間引きのような視線を材料に向けてしまう。造形遊びの材料体験は、材料からどんなことを自分は感じるのかを確かめていく行為のように感じる。

作品制作のための材料体験でも、造形遊びにおける材料体験と同じように材料のもつ可能性を探しだすことを大切にしてきた。しかし、その可能性は作品制作に生かされたときに初めて喜びを感じるものであった。今日のようなローラー遊びでは、純粹に色や形の変化を楽しむことのできる自分がいた。何かのために色や形を学ぶのではなく、色や形は本当に楽しいから学んでいるといった感じである。

造形遊びは、美術の世界でしか味わうことのできない様々な造形要素との出会いを楽しむ場所のような気がした。一つの行為から生まれた結果が、次の行為を生み出すという連続性が探求心を駆り立てる。目的が先にあると、その目的との関係性で「いいもの」「悪いもの」という価値判断が生じるため活動がとぎれてしまうこともある。出前授業の題材も、「国際交流展への出品作品をつくろう」といった作品づくりが、子どもたちの活動目標とはならないようにしないといけない。

院生教材研究振り返りのワークシートより抜粋

枠内の院生たちの意見や感想を分析していくと、材料体験の意味の解釈を通して、「造形遊び」の意義を価値付けていることに気付く。「材料からどんなことを自分は感じるのかを確かめていく行為」や「一つの行為から生まれた結果が、次の行為を生み出すという連続性」といった感想（破線の下線を記した）は、「子どもたちが材料と自分のとの関係性を意味づけたり価値づけたりしていくプロセスを楽しむ活動」といった造形遊びの目的や内容に層を重ねていくものであろう。材料との共時的な体験を語った「何かのために色や形を学ぶのではなく、色や形は本当に楽しいから学んでいる」「様々な造形要素との出会いを楽しむ場所」といった感想（一重の下線を記した）は、感性をマッサージしていくような造形遊びの本質的価値を自分なりに捉え直し意味付けたものであろう。

教材が隠し持っているような意味を見出すような教材研究の場は、図画工作科や美術科における教員研修でもめったに遭遇することはない。個々の活動プロセスが可視化されやすい造形活動の授業づくりでは、どうしても「手立て」や「作業手順」といった子どものパフォーマンスの表出につながる教材研究が重視されるからである。教育実習を直前に控えた学生たちによる模擬授業も、貴重な共同研究の場であるにもか

かわらず、即時的な問題解決に追われ、造形活動の意味や教科の普遍的価値を構造化していこうとする教材研究の場にはなりにくい。

では、出前授業のグループワークにおいては、なぜこのような教材研究の場が生まれてきたのであろう。それは、プロジェクトのスタッフが共有するミッションの他に、「美術科教員としての専門的知識や技能を身に付けさせる」という別のミッションも抱いている教員(筆者)が院生たちと並走しながらグループワークに取り組んでいるからであろう。教員は、彼女たちに巡ってくる学習場面に、美術科教育における重要な「問い」を道しるべとする脇道を見つけると、それが遠回りであってもその道へと誘導し、その道程を美術科教育の専門性を高めるための思索の場としてきたのである。

#### 4. 「色と線のお出かけ授業プロジェクト」で形成された学級担任と院生との実践共同体

##### (1)実践共同体の形成に視点から

A 小学校の出前授業では、プロジェクトチームが提案した活動単元「海の中でかくれんぼ」に、学級担任と院生がともに指導者となって取り組むという実践共同体が形成された。とは言っても、この実践共同体は、学級担任と院生が活動段階を分担して取り組むティームティーチング(以下 TT と記す)体制ができたという程度のものであった。しかし、このささやかな実践共同体の始まりは、「出前授業」という活動に纏わる限界や枠を見直すきっかけとなり、「出前授業」が造形的な教材開発や指導技術を軸とした対話によって、学生が教師たちとともに学校における課題解決の技能を身に付けるプロセスが期待できることを感じさせてくれるものとなった。

ここからは、学級担任と院生との実践共同体が形成された背景と実際の取り組みを振り返りながら、美術科教育法において、出前授業的プロジェクトを導入することの意義とカリキュラムを整備するための鍵を模索していくこととする。

##### (2)TT 体制による授業構想の成立とその鍵

自らが学習者となって活動に取り組んだことで、院生たちは「海の中でかくれんぼ」の活動が「造形遊び」の領域に留まらない多面性をもっていることに強い関心を抱き始めた。この学級担任との TT による授業構想も、院生たちがこの題材に対する価値を多角的に見出したために、授業計画が予定していた活動時間を超えるものになったことから生じたものであった。

学校からの「注文」を教材開発への「課題」、さらにはプロジェクトチームの「ミッション」へと進化させ院生と教員とがスクラムを組んで取り組む出前授業プロジェクトには、強い探求心と連帯感が生まれる。今回も、「ステンシル版画の型をつくる段階では、子ども一人一人の想を引き出すための時間が必要なのではないか」「型を剥がした跡の白模様と剥がした型とのパズル遊びが楽しい鑑賞活動になりそうだ」といった自らの体験から導き出された具体的な意見を互いに出し合いながら、活動内容の検討と改善について話し合った。その結果、院生たちが考案した活動内容を実現するためには、4 時間の活動時間が必要であると判断された。しかし、A 小学校との事前の打ち合わせでは、1 クラスにつき

##### 「海の中でかくれんぼ」の学習計画案

- 1 時間目 いっしょにかくれんぼしたい海の生き物の型をつくる。
- 2 時間目 海の生き物の型を大きな障子紙に貼る
- 3 時間目 海の水を描いていくような気持ちでローラー遊びをする。
- 4 時間目 型を外した後、パズル鑑賞遊びをする。

2時間という出前授業の活動時間しか調整できないことを既に確認し合っていた。今度は、この2時間のタイムラグをどのように調整していくかという難問と向き合うことになったのである。

活動内容の変更や精選を図るべきか、出前授業の延長を検討するかという話し合いになっていたときに、浮上してきたのが担任教師にも指導者としてこの出前プロジェクトに関わってもらおうというチームティーチング(以下 TT と記す)構想である。この TT 構想についての相談メールを、さっそく A 小学校の担任教員たちに送ってみた。すると、添付していた院生たちの活動写真つきの活動計画を見ての賛辞とともに、快諾の返事も記されていた。その後、数回のメールのやりとりを通して、「海の中のかくれんぼ」の活動目標や内容と確認するとともに、それぞれが担当する活動段階を相談した。その結果、子どもたちの思いを引き出す発想段階と出来上がった作品を味わいながらパズル遊びをするまとめの段階は担任教師が、場の設定や準備が大掛かりになる造形遊びの活動の段階は院生たちの出前授業で実施するという TT 体制が整えられた。

今回の TT 体制は、提案した題材「海の中のかくれんぼ」が学校からの「注文」に応えたものであるために実現したものではないだろうか。もし、これが、造形遊びを推進するための題材として大学で開発されたものといった位置づけで提案したものであるならば、やはりトピックス的な学校現場への参画に終わっていたであろう。「福井市小中学校国際交流展の出品作品の制作」といった具体的指標を互いに共有していたことで、異なる立場にいるものがそれぞれの立ち位置や個性を發揮しながら創造的な活動を展開していく実践共同体がスムーズに形成されたのである。このことは、今後、出前プロジェクト的発想を導入した美術科教育法 のカリキュラムを確立するための重要な鍵として受け止めたい。

### (3)学級担任と院生との学び合い

出前授業の日、子どもたちは「イカやタコ、まぐろ、わかめ・・・」といった様々な海の生き物たちの型を抱えて活動場にやってきた。院生とは今日が初対面であるが、子どもたちの中ではもうすでに「海の中のかくれんぼ」が始まっているということは、期待いっぱいの表情から十分に伝わってきた。型となる海の生き物たちを障子紙に貼り付けると、子どもたちは全身をつかってローラー遊びに取り組み始めた。身体と一体になって描き出される線の表情を確かめたり、黄色と青色が交わってできる新しい色の発見を言葉に置き換えたりしながら、どんどんと活動を進めていった。院生たちは、このようにつくりつくりかえていくように活動を進めていく子どもたちの姿をみて、「材料に働きかける」という言葉の意味を実感として受け止めることができたことが何よりの収穫であったと後の反省会で語っていた。同時に、「子どもたちの想を引き出す活動を大切にしたい」というのは、自分たちの思いでもあったにもかかわらず、今回の出前授業では、そのことをどこかに置き去りにしてしまっていたということを一番の反省点として挙げていた。筆者は、その時のことを反省会記録として次の枠内のように綴っている。

・・・最後のクラスの指導に当たっていたとき、院生は子どもたちに「まず、自分がつくった海の生き物の型の端にクルリテープ(接着面が外側になるようにセロテープを輪にしたもの)をたくさんつけてください。クルリテープがついたら、障子紙の好きな場所に貼っていきましょう」と声をかけた。すると、3クラス目の担任教師から「テープを付ける前に、どこに貼るかを子どもたちに相談させてもいいですか?」という提案があったということである。

このときのことについて、院生は「担任の先生の指示がすばらしかった。担任の先生の言葉がけの後、子どもたちはちゃんと友だちと相談しながら、貼り場所を工夫していた。子どもたちが互いの意見を伝え合いながら、自分たちの海の物語をどんどんと展開させていくのを見て素晴らしいと思った。同時に、先のクラスでもこういった話し合いの場をつくるべきだった。」としきりに反省していた。

筆者の反省会記録より抜粋

この院生は、子どもたちが造形活動に取り組む実際の活動の場における学級担任との対話を通して、「自分の実践で足りなかったものは何か」ということに気付かされていたのである。教材研究の場では、院生たちも子どもの想を引き出すことの大切さを話し合ってきたはずであるが、実際の活動の中で子どもの想を引き出すポイントを見極める難しさを痛感したことであろう。何より、「先のクラスでもこういった話し合いの場をつくるべきだった」と、子どもの想を引き出す活動の場が教師のちょっとした働きかけによってつくりだせることを学級担任から学んだのである。

また、担任教師の一人である M 先生からは、出前授業後次のような E メールが送られてきた。

私にとっては、今回の造形遊びはいろいろと考えさせられた活動となりました。子どもたちがすごくいきいきとした顔で、喜んで活動をしてくれたこと、いつもはなかなか自分の絵が描けず泣きながら図工に取り組む子が、この活動は真っ先に動いていたことなど、いろいろな発見がありました。また、このような活動をしたいなと思って、なかなか時間が取れない(準備などの時間)、場所が無いなどなかなか大変だということも改めて感じました。

M 教員からの礼状 (E メール) からの抜粋

このメールからは、「造形遊び」は子どもの中にある表現意欲や探求心を引き出す活動であること担任教師も実感していたことが伺える。院生たちの提案した題材に寄り添うことで、担任教師もこれまでとは異なる価値を見つけることができたのであろう。

## 5 . まとめ - 出前授業型プロジェクト学習の導入に向けて

### (1) 出前授業型プロジェクト学習設計の指針

本稿では、美術科教育法 に導入しようとする出前授業型プロジェクト学習の在り方を模索するために、2010 年に取り組んだ「色と線のお出かけ授業プロジェクト」の取り組みの中から、探求的な教材研究や教員との協働的な学び合いが生まれた場を中心に考察してきた。そこから導き出した特徴的要素が出前授業型プロジェクト学習を導入することの意義につながるものである考え、プロジェクト設計の指針とした。

○学校からの「注文」のような課題を出前授業型プロジェクトの共有ミッションにすることで、その背景に潜む学校の背景や課題に寄り添って題材を開発したりや学習活動をデザインしたりするスタッフの協働的な学びの場が生まれる。

○学校からの「注文」のような課題を担当教師との共有ビジョンとすることで、それぞれの立ち位置や



個性を生かした実践共同体を形成し、担任教師とプロジェクトスタッフとの互恵的な学びの場が生まれる。

○出前授業型プロジェクト学習では、学生スタッフ自らが探求的に活動していくが、大学教員もスタッフとしてそのプロセスを並走していくため、美術科教育の専門性を高める思索の場となる道程が積極的に選択されていく。

## (2)出前授業型プロジェクト学習を導入することの課題

これまでの「色と線のお出かけ授業プロジェクト」は、学校からの要請があってから立ち上がる不定期なプロジェクト学習であった。美術科教育法 にこのようなプロジェクト学習を導入するためには、予め附属中学校における出前授業をカリキュラムに位置づけておく必要があるだろう。また、これまでの教科教育や教科専門における学びが活かされ、尚且つ、学校からの「注文」と同じように教員と学生の共有ミッションや共有ビジョンへとなるプロジェクト学習の課題が十分に検討されなければならないだろう。

## 註

1 福井大学地域教育学部では、2009年よりスタンダード策定作業に入り、まずスタンダードの全体的な枠組みについて共通モデルが構想された。2010年より、そこで確認された枠組みに則って、領域別（各教科や障害児教育、発達科学）のスタンダードの内容が全学的な取り組みのもとで検討され、2010年度末に「平成23年度版教員養成スタンダード」が完成した。

2 「美術科教育法」は、教育課程及び指導法に関する科目の中で教科(美術)の指導法の分野として位置づけられている授業であり、現在は美術科教育法 を始め、4つの授業が開設されている。

3 「造形遊び」は、材料を基に造形遊びをする活動として位置づけられている図画工作科における表現領域である。昭和52年に学習指導要領に示されてから、30年余りたっているにもかかわらず、学校現場では未だに充実した活動が行われていない実態がある。

## 参考文献

- 1 福井大学教育地域科学部平成23年度 教員養成スタンダード
- 2 『教師に必要な能力の定義・洗濯とその記述・評価の方法に関する研究』平成21年度福井大学教育地域科学部学部重点研究報告書
- 3 『教師教育 Vol4』福井大学大学院教育学研究科